

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：34406

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13170

研究課題名（和文）ママ友に見る対立的場面でのイン/ポライトネスと周縁化

研究課題名（英文）Im/politeness and Marginalization in Conflictive Situation among Mom-fellows

研究代表者

大塚 生子 (Otsuka, Seiko)

大阪工業大学・工学部・講師

研究者番号：80759027

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、1. 日常会話におけるイン/ポライトネスの解明 2. イン/ポライトネス研究における「感情」の役割 3. イン/ポライトネスの動機：利害関心 vs 人間関係への配慮、の3点を明らかにすることを課題とし、実際の相互行為・YouTube動画・二次資料の談話分析を通して検討を行った。ポライトネス研究はこれまでフェイス概念を基盤に行われてきたが、本研究では感情を取り入れることの重要性を主張し、継続的人間関係において利害と人間関係への配慮に対立がある場合に、人間関係距離の調整など間接的な方法によって品行と感情との間でバランスをとった戦略選択が行われていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題では、日本では未だに多用されているBrown and Levinsonのポライトネス理論の枠組みを乗り越えたイン/ポライトネス研究へのアプローチ（談話的アプローチ、フェイスの問題、感情など）を導入し、理論的枠組みだけでなく実際の談話分析をとおして実証研究を行った。特に、感情は世界的には近年のイン/ポライトネス研究の主要課題となっており、実際の談話分析を通してイン/ポライトネス研究と感情の関連を示したことは大きい。

また、イン/ポライトネス研究の対象を社会へと広げる新たな視点も導入し、実際の相互行為の姿を明らかにするため分野横断的なアプローチを行うことを提案した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, the following three points were examined through discourse analysis of actual interactions, YouTube videos, and secondary sources: 1. investigation into im/politeness in daily conversation, 2. role of "emotion" in im/politeness research, and 3. motivation for im/politeness: interest vs. concern for human relationships. While im/politeness research has been conducted based on the concept of face, this study argues for the importance of incorporating emotions, and suggests that when there is a conflict between interests and relational concern in ongoing relationships, it is clear that people are making strategy choices that balance between demeanor and emotion through indirect methods such as faking psychological distance from the other.

研究分野：イン/ポライトネス

キーワード：イン/ポライトネス 談話分析 対立 ママ友 マウンティング 感情 フェイス・品行

1. 研究開始当初の背景

LINE、facebook や Instagram など、コミュニケーション手段が多様化した現代、人々は時間や場所を問わず他者と繋がり、様々な情報の交換や感情の共有を頻繁に行うことが可能になった。一方でこれは、負の感情、情報の共有やイデオロギーの拡散も容易にし、ヘイトスピーチやいじめなどの社会問題を促進させる一因ともなっている。

同じ集団に属する者同士の対立は、当人同士だけでなく、集団内の他のメンバーをも巻きこむ対立に発展しうる。いわゆる「いじめ」はあからさまな無視、排除といった明らかな暴力を指すだけでなく、例えば会話における相手の位置づけや、当然予期されるタイミングでの相槌の欠如など、日常起こりうる小さな対立を通じた他者の周縁化に端を発して相互行為的に構築される人間関係の一つの形と考えることができるだろう。

言語使用と人間関係の構築(維持、崩壊・破壊を含む)を取り扱うイン/ポライトネス研究はこれまで、「円滑なコミュニケーション」の前提に基づく「相手への配慮」を中心とした枠組みに沿って発展してきたため、人間関係を悪化させることにつながる対立的場面や、人を周縁化する相互行為に着目してこなかった。しかし 21 世紀という多様化・個別化が進む現代、またその反動として分断化・二極化が横行する現代、人々のコミュニケーションでも多様化・二極化は進んでいる。このような社会状況の下、これまで明らかにされてこなかった「負のコミュニケーション」を分析することは、グローバル社会の円滑なコミュニケーション基盤の糸口の発見につながると思われる。

ポライトネス研究は従来、Brown and Levinson(1987、以下 B&L)のポライトネス理論を基盤とし、相互行為において相手の面子・フェイス(face, Goffman 1967)を傷つけないために話し手が用いる言語的方略の分析を中心に発展してきた。このような合理主義的アプローチでは、理想的なコミュニケーションや社会像、合理的な人間像が暗黙の前提とされ、それに反するインポライトネスや、社会心理学における攻撃的振る舞いは、枠組みからの逸脱として排除されてきた。しかしこのような負のコミュニケーションへの視点なしに、ヘイトスピーチやいじめのような非合理的行為が横行する現代の社会をうまく捉えることはできない。

本研究では、上述のような価値観の多様化が加速する社会の中で、コミュニケーションの基盤となりうる「感情」や「利害関係への配慮」などの視点から、2000 年代に起こった社会構築主義的視点への転向、いわゆる談話的転換(discursive turn)以降、現在のイン/ポライトネス研究で重要な課題と見なされているもののうち、以下の問題を中心に取り扱い、負のコミュニケーションを含むより広い相互行為を対象とする枠組みを用いた分析を行うことを目指した。

1. 日常会話におけるインポライトネスの解明

従来「ポライトネスの失敗」とされてきたインポライトネスは、談話的転換分析対象としての認知を得た。しかしこれまでの研究はテレビ討論や軍隊(Culpeper, 2011 等)などの制度化された状況を対象にしているものが多く、日常のインポライトネスの解明およびポライトネスとインポライトネスを含む評価の枠組みの構築が喫緊の課題となっている。

2. イン/ポライトネス研究における「感情」の役割

B&L が取り入れて以来イン/ポライトネスの鍵概念となっている「フェイス」は、先行研究においてもこれまで指摘されてきたように(Langlotz and Locher, 2012)、感情と切り離して考えることができない。大塚(2013)では、夫婦間会話に見られた対立場面のストラテジー分析を通し、感情的フェイス侵害行為と方略的フェイス侵害行為の分類を行ったが、現在のところイン/ポライトネス研究は総じて感情の重要性の指摘のみに留まっていると言わざるを得ず、実証研究に基づいた言語モデルの提案が待たれている。

3. イン/ポライトネスの動機：利害関心 vs 人間関係への配慮

Mills(2003)は、多くの言語モデルでは、当該相互行為において何を達成したいかという短期的目標と人間関係の維持という長期的目標を分けて考えていないという問題を指摘している。対立場面では以下のように、二つの目標の間に人間関係に関わる本質的な対立があり、一方を満たそうとすると他方が失われる状況が生まれる。

- ・短期的目標：当該対立状況において相手を納得させ、自分の意見・希望を通すこと
相手から受けた面子の侵害や不快感情を報復によって昇華すること(実質的利害)
- ・長期的目標：相手との人間関係を継続すること(人間関係への配慮)

2. 研究の目的

社会問題ともなっている「いじめ」は談話を通して構築された人間関係の一つであるが、イン/ポライトネス研究を含め、言語学はこのようなコミュニケーションの負の側面を積極的に扱ってこなかった。本研究は、実際に行われたママ友集団内での談話を資料とし、集団内の協調を乱す対立的発言・相互行為・フレーム(Gumperz, 1982)、あるいはメンバーのフェイス・感情を侵害するなど「罪を犯した」個人が、どのように扱われ、周縁化されるかを明らかにすることを

目的とする。

インポライトネスに関連する実証研究はこれまで十分に行われてきておらず、また感情や動機といった要素についても十分検討されていない。本研究ではこの点を踏まえ、従来の枠組みでは説明できなかった対立場面、負のコミュニケーションへのアプローチとして、先の研究で提唱した《自己フェイス保持+感情的充足と実際の利害+良好な人間関係とのバランス》というイン／ポライトネスの動機を説明する枠組みを検証しつつ適用する。これは、新たに社会関係資本（社会学）やポジショニング理論（社会心理学）といった学際的な視点を導入したもので、談話内の分析だけで完結してきた従来の枠組みを超え、イン／ポライトネス・ストラテジーの決定や評価の原理を包括的に説明することを目指すものである。

3. 研究の方法

分析の枠組みには主に、イン／ポライトネス研究(*relational work*(Watts, 2003)、集団内慣習(*in-group ritual*; Kádár and Bax, 2013)など)、相互行為の社会学（相互作用的フレーム、文脈化の手がかりなど）および社会心理学（ポジショニング理論など）における諸概念を導入し、分析資料として以下を用いた。

【一次資料】

1. 生の談話資料（ママ友二者間の対面相互行為およびメールでの相互行為（LINE等のメッセージアプリを含む）、他集団グループLINE）
2. 上記談話資料収集後の調査協力者へのフォローアップ・インタビュー（半構造化インタビュー）
3. 質問票（対象とする調査協力グループおよび個人に関する予備的情報）
4. 動画資料（YouTube・ドキュメンタリー番組等）
5. 文献資料

当初はママ友集団の会話を分析資料に用いることを予定していたが、新型コロナの影響により従来のようにママ友らが気軽に集まっておしゃべりをする機会がなくなった。調査のためにそのような場を設けることも適切ではないと判断したため、分析資料として生の会話をを用いることができなかった。

4. 研究成果

本研究課題で明らかにすることを目指した3つの問題に対し、以下の結果を得た。

1. 日常会話におけるインポライトネスの解明

国内ではこれまで、インポライトネスを対象にした研究はほぼ行われてこなかった。上述したように、国内研究は未だ「ポライトネス」といえばBrown and Levinson(1987)一択という状況である。しかし、我々の日常会話は全てが「円滑」なわけでもなければ「心地よい」やりとりばかりで成り立っているわけでもない。さらに、ポライトネスとインポライトネスは相互行為における一つながりの評価であり、両者を明確に切り離して考えることはできない。採択者は本研究課題において、「対立」と「マウンティング」の談話分析を通し、個人間相互行為におけるポライトネスとインポライトネスの接点を探求してきた。

その結果、いずれも継続的な人間関係にある会話参加者同士の相互行為であるため、ストラテジー選択のための大きな動機の1つが、「品行」の保持であることが明らかになった。

相手との人間関係に無頓着な場合、我々はむしろ自由に振る舞える。相手との付き合いをなくなっても良いものと見做していたり、特定のコミュニティでの評判を気にする必要がない場合、相手を不快に思えばそれを態度とことばにして表明することができるし、自慢したい時には堂々と自慢できるだろう（身体化された「良心の呵責」や「自分のあるべき姿」のような内省的自己規範は除外する）。しかしそうではない場合には、自分の振る舞いが相手からどのように評価されるかは、相互行為上の大きな関心事になる。

「対立」場面では、相手に対して攻撃したいという感情を持ちながら、攻撃することによって付与される否定的な評価を免れるために、さまざまなストラテジーが用いられていた（攻撃的発話の前後に相手のフェイスに配慮した発言を行う、攻撃的発話を「攻撃」でないように見せるために、親しい関係で用いられるような語彙選択を行い、さらにそれを常体・方言を用いて表現する、など）。「マウンティング」においては、自分のフェイスを相手（他者）よりも高く位置づけることを目指しながらも、そうとは見えないよう自虐・謙遜表現を併用し、あたかもそれが「自慢」ではないかのように見せかけるストラテジーが用いられていた。すなわち、その実話し手の意図は相手フェイスの侵害だったり、自己フェイスの高揚だったりするにもかかわらず、言語表現上「ポライト」である、あるいは少なくとも「インポライト」であると非難されないストラテジーを用い、いずれも「他者を攻撃する人」「自慢する人」のような相互行為における「適切さ」から逸脱していないように見せる（品行）ことが目指されている。

これらのストラテジーはその意図が隠されているため、語用論的に解釈してもBrown and Levinson (1987)で示されている「ポライトネス・ストラテジー」であるかのように見える。

しかし、フェイスの互恵的な性質に基づき、「相手のフェイスを補償する」ことを前提としたストラテジー選択について論じる Brown and Levinson とはその前提が異なるものだといえよう。ポライトネスとインポライトネスの境界は曖昧であり、全ての一見「感じの良い」やりとりが、肯定的に受け取られているとは限らない。

一方で、このように我々が相互行為上の規範を重要視し、「品行」を保って、相互行為の相手との人間関係を円滑に構築・維持しておきたいという欲求は、単純に相互行為における個人間の言語表現の分析、という「客観的」分析だけにとどめておくべきではないだろう。

Brown and Levinson (1987) がその理論の前提としたように、我々が「円滑な」「心地よい」コミュニケーションを、(状況が許せば) 求める気持ちが強いこともまた真であろう。しかし、イン／ポライトネス研究が社会と人間を対象に研究する分野である以上、相互行為上の規範への偏向がもたらす問題点も提議しなければならない。

本研究課題では、個人間相互行為においていわゆる「ヘイトスピーチ」(差別的談話) が構築されていく様を取り上げ、イン／ポライトネスの観点から分析を行った。そこでは、「特定のアイデンティティを持つ集団を差別すべきではない」という社会的規範を互いに認識しているにもかかわらず、一方が差別的なことをほのめかすと他方もそれに同調し、そのようなやり取りを相互に交わしている間に「ほのめかし」が徐々にほのめかすだけにとどまらず、明示的な差別発言になっていく様子が観察された。ここで優先されているのは、差別に関するより大きな社会規範よりも、相互行為において互いに反目せず、相手のフェイスをサポートしながら良い人間関係を形成していこうという相互行為上の規範である。

特定のアイデンティティを持つ人々の存在を軽視し、彼らの社会、経済、文化、政治等における対等な参与を阻害する「差別」という行為に自分たちが加担することになったとしても、協働で互いのフェイスを保持し合うコミュニケーションは、目の前の相手との人間関係を良い状態に構築・維持するための、つまり相互行為上の「善」となってしまうのである。

大塚ら (2023) でも指摘したように、日常会話は純粋に「人間」で行われるものとして社会から切り離すことができるものではない。社会的規範や常識など、社会に存在する認識は個人間会話に影響を与え、またその個人間会話で構築されたディスコースが社会全体へと還元するのである。日常会話におけるイン／ポライトネスは、従来の方法論と枠組みの問題を見直すだけでなく、それに伴って分析対象と視野も広げたより広い社会と人間を扱う視点を持つべきだろう。

2. イン／ポライトネス研究における「感情」の役割

インポライトネスと感情は、典型的に「怒り」や「憎しみ」といった攻撃性の高い否定的感情と強く結び付けられてきた。それはおそらく多くのイン／ポライトネス研究が、フェイスを侵害されたことによる「ポライト」や「インポライト (ルード)」という限定された一次的評価を対象にしてきたためである。しかし 1 対 1 の話し手・聞き手間の相互行為に限らない社会的関係の構築の場へと分析対象を広げ、「ポライト」や「インポライト (ルード)」以外の評価も扱おうとするのであれば当然、それに対応して対象としなければならない感情の領域も広がるだろう。したがって、「怒り」や「憎しみ」以外の感情 (例えば「傷つく」という心的状態) も取り扱っていく必要がある。

しかし、心理学分野においても感情の分類、特に一次的感情 (生得的で生物学的な次元) と二次的感情 (習得的で社会的に構築される次元) との間の議論に決着はついておらず、その中間的な立場を採る研究もあるなど、コンセンサスが存在しない。また、そもそも感情の分類以前に何を「感情」と呼べるのかという問題もあろう。話し手・聞き手のフェイス、品行の問題、利害、感情その他、「いかなる要素がどれだけ関与性があり、イン／ポライトネスを考える際にそれらをどのようにデザインしたらよいのか」という問題は未知数である。

本研究課題においては、ハイト (2014) がわれわれのふるまいの根底にあるのは、感情的反応を伴う何かうまく説明できない「直感」であるとの主張に基づき、感情を「肯定的感情」と「否定的感情」、あるいは「快」「不快」と大まかに捉えた上で、それらをふるまいを産出・評価する際の基盤とみなし、「感情」にまつわる相互行為について考察した。

● 「表示されない感情」にまつわる問題

イン／ポライトネス研究は主に談話を対象にした研究分野であり、そのため、談話 (あるいは表情や振る舞い) に現れない「感情」については分析する手段を持たない YouTube 動画をもとに考察した。動画では、年配の男性上司から若手女性社員に対して「〇〇ちゃん (女性社員) がいてくれるお茶はおいしい」や「彼氏はいないのか」などの発言がなされ、女性がそれを非難したり否定したりする様子はない。動画であるため彼女が「嫌がっている」様子は明らかだが、実際の社会ではおそらくそのような手がかりも出さないよう、「円滑」な会話に終始するケースが多いのではないかと。たとえ彼女がそれを「不快」に思っているとしても、上司との権力関係のためにそう表出できないケースが多いだろう。一方で、男性上司についてもおそらく親しみをもって接しているだけで、「悪意」はないのである。そして女性社員の方は、権力問題だけでなく、それもわかっている。相手から (実際の発言内容はどうであれ) 親しみを示されて、それを拒絶するのは相手の感情を傷つけることにもなってしまう。ここに働くのも、相互行為上の「ポライト」の規範である。おそらくこういった相互行為はセクハラ以外の場面でも日常的に行われている (前述した個人間会話における差別的談話の

再生産にも見られる)。そして、「不快」な感情は、隠されている。しかしやりとりされる「ことば」だけを切り取って観察して、このような相互行為を「円滑」だと結論づけるのであれば、それはあまりにも実際とかけ離れていると言わざるをえないだろう。

● 実質的利害を超越する感情

上の例では感情を表出することを抑え、権力関係や対人関係に配慮した「合理的」な相互行為を扱っている。しかし一方で、そのような理性や合理を超え、感情が表出してしまう場面もある。これは、アメリカの裁判所での様子を集めたドキュメンタリー番組を素材に考察した。Brown and Levison (1987) は相互行為者として「合理的で理性的な大人」を想定し、それを基盤にストラテジー分類を行った。しかし、我々人間は、自分たちで考えるほど合理的でも理性的でもないということが行動経済学の基盤になっていることから明らかなように、「その場に適切ではない」ということがわかっているにもかかわらず、「ポライトに振る舞う」という相互行為上の規範を守れない場合がある。談話例では検察官が感情的になって裁判官に暴言をはく様子を扱っている。一定時間をおいた後、検察官は裁判官に謝罪を行うが、法廷侮辱罪に問われ免職になったという。本研究ではこのように、実質的利害を超越して不適切に振る舞ってしまうほど、感情というのは時に相互行為を支配することを示した。

● 感情の不適切な表出は失敗か

上の例では検察官が失職という、明らかに「失敗」（彼が少し落ち着いた後で裁判官に真摯に謝罪していることから）であったといえるだろう。

しかし、「不適切」な感情表出が、必ずしもマイナスに作用するわけではない。本研究では橋下徹元大阪府知事と在特会の櫻井元代表との対談を分析対象とし、彼らの振る舞いを分析した。

入室当初から対立的な二人であったが、お互い「おまえ」「君」などの呼称にこだわり、罵り合いをして席を立つなど、終始幼稚なやりとりであった。しかし、量・質ともに同等のやりとりをしていたにもかかわらず、橋下氏は知事であったがために期待値が高く、橋下氏に対する失望は大きかった（二次資料より）。一方で櫻井氏についてはもともと有意義な議論を行う人物ではないという前評判もあり、彼の名前が取り沙汰されることで結果として「売名」になり、彼の著書の売上にも影響を与えたという。

このように、視野を個人間での相互行為だけでなく、その場にいる第三者やテレビ、ネットを通してこれらを見ることになる多くのオーディエンスにまで広げた場合、櫻井氏の不適切な感情表出や失礼な振る舞いは、結果的に「失敗」ではなかったと言えるだろう。

不適切な感情表出を伴うインポライトネス状況は、ある種のストラテジーとして機能する場合もある。

3. イン／ポライトネスの動機：利害関心 vs 人間関係への配慮

場合によっては、「ポライトネス」は自己の利益のために意図的に用いられる。たとえば、服やの店員が客に「よくお似合いですよ」と褒めるのは、店員のフェイスの問題というよりも、おだてて売上を伸ばそうという実質的な利益を得ようとするからではないだろうか。しかし一方で、そのような意図が相手から見透かされると「おべっか」「お世辞」と言われ、自身の品行を失う上に、相手との人間関係にもひびが入る可能性がある。

本研究課題では、「対立」場面の分析を通し、「対立に勝利する」という自身の利益と、同時にその相手の人間関係を維持しておきたい、という人間関係への配慮の間の葛藤を扱った。

継続的な人間関係は社会関係資本として機能する。その相手から実質的な何らかの利益、情報、時には友情といった様々なものを得られる可能性があるのだ。社会関係資本として維持しておくべき相手との間に対立が起こった場合には、上述したように、当該の対立において相手を攻撃するなどして不快感情を昇華させたいという欲求が烏滸あるが、同時に相手との関係を円滑に維持しておくべきであるという損得勘定が働くのである。他者への攻撃は、一般社会規範に照らし合わせても、相互行為上の規範に照らし合わせても、それらから逸脱する行為なのであり、「社会的に適切ではない人間」という評価を受けてしまう可能性がある。

そこで、ママ友の対立の場合には、そのような批判を受けないよう、受けた場合に言い逃れができるよう、不快感情のあからさまな表出は避けられ、間接的な方法により攻撃が行われる。しかし時には、前項で述べたように、感情が理性を凌駕してしまう場合もあり、談話内では相手からその点が間接的に批判されている様子が見られた。

利害関心と人間関係維持の対立が起こる場合はこのように、どちらにどの程度の比重をおくべきかというストラテジー選択の問題になり、また不快感情が強い場合にはそのような「計算」が働かない場合もある。今後もさまざまな談話を扱い、これらの分析の積み重ねにより体系化を行っていく必要がある。

以上のように、本研究課題ではイン／ポライトネス研究においてこれまで取り上げられてこなかった視点や、国内では検討されたことがなかった観点などを取り入れ、それぞれの研究はイン／ポライトネス研究の発展に寄与するものになった。

一方で、新型コロナウイルスの蔓延によって当初予定していた生の会話を収集することができず、概念や枠組みの検討に終始してしまった研究も多い。今後は本研究課題によって得られた知見を基に、実際の会話を検討していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大塚生子	4. 巻 18
2. 論文標題 イン/ポライトネスの参与の枠組みと多面的フェイスワーク	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第25回日本語用論学会発表論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ポボヴァ・エカテリーナ、大塚生子	4. 巻 47
2. 論文標題 医療隠語に見る配慮のストラテジー：ポライトネスの観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第47回社会言語科学会発表論文集	6. 最初と最後の頁 120-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大塚生子	4. 巻 64
2. 論文標題 日常会話における差別の（再）せいさんについて－ヘイトスピーチ（差別的談話）をマイクロレベルで考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 37, 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大塚生子	4. 巻 52-9
2. 論文標題 ママ友は『仲良く』ケンカする：『保護者』と『友だち』の狭間の攻撃ストラテジー	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 現代思想 6月号	6. 最初と最後の頁 136, 144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 ポポヴァ・エカテリーナ・大塚生子
2. 発表標題 医療従事者間での対人関係による業界用語の 使い分け:看護師への半構造化インタビュー調査から
3. 学会等名 第 48 回社会言語科学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 OTSUKA, Seiko & YANAGIDA, Ryogo
2. 発表標題 A Study on “Mounting” :A New Interactional Concept Related to Im/politeness in Japanese
3. 学会等名 18th International Pragmatics Conference
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 OTSUKA, Seiko
2. 発表標題 A Study on “Mounting” :A New Interactional Concept Related to Im/politeness in Japanese
3. 学会等名 International Pragmatics Association (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大塚生子
2. 発表標題 マウンティング
3. 学会等名 日本語用論学会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 ポボヴァ・エカテリーナ、大塚生子
2. 発表標題 医療従事者間での対人関係による業界用語の使い分け 看護師への半構造化インタビュー調査から
3. 学会等名 社会言語科学会
4. 発表年 2023年～2024年

1. 発表者名 Ryogo Yanagida and Seiko Otsuka
2. 発表標題 Eloquent silence as a counter-heckling measure: An analysis of parliamentary debates at the Japanese Diet
3. 学会等名 CADDAD Conference
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大塚生子
2. 発表標題 イン/ポライトネスの参与の枠組みと多面的フェイスワーク
3. 学会等名 第25回日本語用論学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ポボヴァ・エカテリーナ、大塚生子
2. 発表標題 医療隠語に見る配慮のストラテジー：ポライトネスの観点から
3. 学会等名 第47回社会言語科学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大塚生子
2. 発表標題 「マウンティング」はなぜいやらしいのか：イン/ポライトネス研究の潮流と隠匿のコミュニケーション
3. 学会等名 立命館大学
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大塚生子
2. 発表標題 イン/ポライトネス研究の潮流とマウンティングのコミュニケーション
3. 学会等名 大東文化大学
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山下仁、大塚生子、柳田亮吾
2. 発表標題 イン/ポライトネス研究の地平
3. 学会等名 第30回情報保障研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ryogo Yanagida and Seiko Otsuka
2. 発表標題 Heckling initiated interactions at the Japanese Diet
3. 学会等名 International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大塚生子
2. 発表標題 動的イン/ポライトネス研究の試み：インポライトネス場面におけるフェイスワークに着目して
3. 学会等名 動的語用論研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大塚生子
2. 発表標題 「マウンティング」をイン/ポライトネスから考える：「自分ほめ/自慢 (self-praise, bragging)」との比較を通して
3. 学会等名 日本語用論学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 OTSUKA, Seiko
2. 発表標題 Analyzing Im/Politeness strategies in Conflictive Message Exchanges between Fellow Moms in Japan: Emotion and Demeanor
3. 学会等名 14th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 YANAGIDA, Ryogo and OTSUKA, Seiko
2. 発表標題 A caste system to divide fellow-moms in Japan: Ideology and relational work
3. 学会等名 14th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 OTSUKA, Seiko and YANAGIDA, Ryogo
2. 発表標題 The Interactional Function of “yaru” in Kansai Dialect
3. 学会等名 1st East Asian Pragmatics Symposium (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 阿部公彦、大塚生子、佐藤亜美、椎名美智、滝浦真人、福島佐江子、柳田亮吾	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 イン/ポライトネス	

1. 著者名 大塚生子、柳田亮吾、山下仁	4. 発行年 2023年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 300
3. 書名 イン/ポライトネス研究の新たな地平	

1. 著者名 田中廣明ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 -
3. 書名 動的イン/ポライトネス研究の試み: インポライトネス場面に おけるフェイスワークに着目して	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------